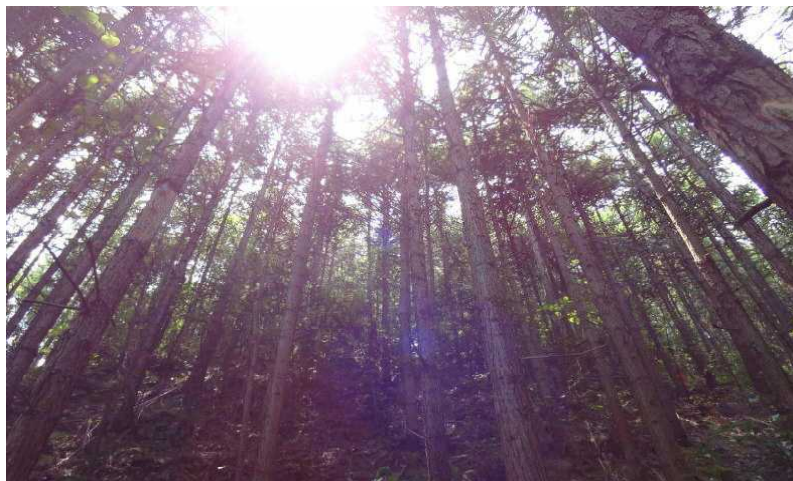


Climate Change in China's Gutianshan Forests 中国浙江省の森林と気候変動

西宮市立安井小学校 真柴 政明

はじめに

教員フェローシップは、昨年に続き二度目の挑戦である。私は以前、別団体によるウミガメの調査に加わったことがあり、自然や生き物、環境に対する興味を少なからず持っていた。そんな昨春、何気なくインターネットを見ていたらまた出会ったのが、この「アースウォッチ・花王教員フェローシップ」である。今年の春も早速HPの募集要項を調べ、申し込むことにした。



そんな折、今年の4月、私はずっと続けてきた学級担任を外れ、「児童生徒支援加配」という立場で6年生を中心とする全校生に関わることとなった。学力不振、人権問題、生活指導、不登校、親の教育力…本校にはいろんな状況に置かれた子どもたちがいる。これらの子どもたちの支援と人権教育の推進が、「児童生徒支援加配」である私の主たる仕事である。

私は、今回挑戦しようとしている「環境教育」も、「人を大切にすること」「自分を大切にすること」「みんなを大切にすること」という「人権教育」の根幹と重なるのではないかと考え、4月の応募時の論文にまとめた。プロジェクトを終えた今、私の心に大きく残ったものは、やはりこの3つではなかったかと思う。「環境を守る」という目的を持ち、地球規模で「人を大切にすること」を考え、生物をはじめとする「みんなを大切に」しようとしている研究者たち。そして、そこに集まるボランティアや、活動を支援する人たち…。この活動が、結果的に自分の生活の場を守ることに繋がったり、汗を流しながら達成感を味わったりといった「自分を大切にすること」に繋がっているのである。

12日という長いようで短かく感じた貴重な日々であった。ここでの自然や人とのつながりを振り返りながら、自分がどう高まったかをまとめてみたいと思う。

プロジェクト概要



- (1) プロジェクト名 中国浙江省の森林と気候変動
Climate Change in China's Gutianshan Forests
- (2) 調査地 中国浙江省 Gutianshan (古田山) 国家自然保護区
- (3) 期間 2011年7月25日(月)～8月5日(12日間・TEAM 1)
- (4) 主任研究者 Dr. kequan Pei (フィールドディレクター・中国気候センター)
- (5) スタッフ 4名 (アースウォッチ中国・香港より) ほかに現地研究者・スタッフの方々
- (6) ボランティア 9名 (USA 3名、シンガポール4名、日本2名)
- (7) プロジェクトの概要

中国東部の浙江省。高温多湿なこの地で行う気候変動の調査がこのプロジェクトの目的である。

調査地である古田山国家自然保護区周辺には、自然林地帯と植林地帯の両方が広がっている。この森で、人々の生活に大きな影響を及ぼす「気候変動」の現実や複雑さを解き明かそうとする研究が進められている。

この研究のキーワードとして注目されているのがカーボン(炭素C)である。しかも森林という場所は、地上のその他の場所よりも多くの炭素を土壌に蓄えることができるというのである。森林



は、二酸化炭素（CO₂）を吸収して酸素（O₂）を排出しているが、その過程で光合成を行い、炭水化物を作って栄養にしている。この時、カーボン（炭素 C）は植物内に蓄えられるが、やがて落葉や倒木によって土壤内に移動し、菌類やバクテリアの分解作用によって再び炭酸ガスとなって大気に放出される。つまり、土壤の炭素の量や落葉の種類、生物の糞等を調査することによって、分解作用の進捗状況が分かるというのだ。分解が進めば CO₂も増えることになるし、分解によって木の生長が遅れるなら、当然 O₂を生み出す作用は進まなくなり、CO₂はますます増加することになる。このような炭素の量の調査によって、気候変動の現状を知ることができるのである。

また、自然林と植林とでこれらの状況が異なるのであれば、それを手がかりに今後の気候変動へのアプローチの仕方を工夫できる。ここ古田山の森林には、多くの研究の手がかりがあるようだ。

私たちボランティアは、研究者たちの指導のもと、これらの調査のサンプル土の収集、採取した土から根を取り除く作業、落葉の分類と重さ調べ等を行っていった。

5月～7月・事前準備

職場への電話で参加決定の連絡を受けたのが5月中旬。校長や同僚たちにはすぐその旨を伝え、具体的な準備が始まった。

「合格書類到着後一週間以内に」という書類までは良かったのだが、二週間以内に提出の「Personal Profile」、これが第一の難関であった。とにかくプロフィールをすべて英文で書かなければならない。私は、募集要項に「日常英会話程度は必要」と書かれていることを知りつつも、全くといっていいほど英語ができない自分をごまかしてきたが、いよいよ何とかしなければならぬ。そこでどうしたかと言うと…、翻訳ソフトである。何とかソフトが私の思いを英訳してくれて、私にも分かる簡単な英文ができあがった。

次は英文で書かれたブリーフィングの読破である。集合場所や持ち物、予防接種の必要性など具体的なことがすべて英文で書かれた一冊の本。これもずいぶん翻訳ソフトのお世話になったが、出てくる日本語訳はめちゃめちゃな文章で、ソフトも自分も全く信用ができないのである。たとえば予防接種。何となく必要がないように書かれているような気がするのだが、「狂犬病は怖い」とか「医師に相談を」と書かれてあると、自信がない私はついつい予防接種を受ける道を選んでしまう。最終的にはとても高価な狂犬病の予防接種を受けたのだが、実際は犬と出会うこともなく、予防接種は必要なかったように思うのだが…。

次に、航空券等の予約である。私は今回が26年ぶりの海外渡航である。そのため、パスポートすら持っていない状況だったため、その手配から始めた。行き先が中国という近隣国であること、準備に着手するのが早かったこと等により、航空券については日本の航空会社にもかかわらず安価に求めることができた。

あとはハイキングシューズや電子手帳等を購入した程度で、予防接種以外は特に大きな出費もなく準備を整えることができたように思う。

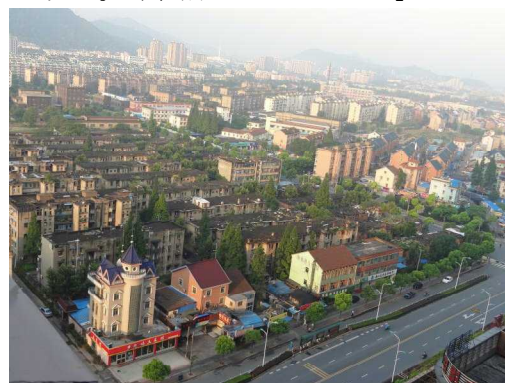
7月24日（前日）・出発

集合は25日だが、当日の出発では集合時刻に間に合わないため、前日から指定ホテルに一泊する。

いよいよ出国。3時間ほどで中国杭州へ到着。全日空機を使用したため、機内では完全に日本気分だったが、杭州に到着して荷物を受け取った途端、孤独感がひしひしと湧いてきた。

ここは中国。タクシーに乗っても、どうやら英語は通じないようだ。中国語は「ニーハオ」と「シェシェ」、「イー、アール、サン、スウ、ウー、リュウ、チー、パー」しか知らない。英語で書かれたホテルの住所に困惑する運転手だったが、外国客の私に気を遣い、「OK、大丈夫だ」という仕草で安心を促そうとしてくれる。途中、運転手は何度も大声で人に道を尋ねながら、何とかホテルに到着。もうすでにこの段階でドキドキ感は最高潮である。

その後、（海外慣れしなければ…）という思いでホテル周辺の散策に出るが、目に飛び込んでくる溢れんばかりの中国文化と関西を上回る蒸し暑さに、一日目にして完全に疲れ果ててしまった。



ホテルの窓から（杭州蕭山地区）

7月25日・Rendezvous～Gutianshanへ

いよいよ生活を共にする仲間たちとの出会いである。指定時刻にホテルのロビーへ行くと、アースウォッチTシャツを着た Justin（世話役の若い中国人研究者）が笑顔と握手で出迎えてくれた。また、そこには Mike、Richard、John という3名の USA のボランティアもいて、私のぎこちない英語で何とかあいさつを交わす。

5名でマイクロバスに乗り、現地へ出発。途中、空港で Caishi, Sam, Brandon, AnnHong という4名のシンガポール人の若者ボランティアたちを乗せ、計9名での中国道中は始まった。

途中休憩の際、どう話したらいいかわからないでいる私にみんなが気楽に話しかけてくれる。言葉が途切れ途切れになってもあきらめず、

「日本のことを教えてほしい」と知っている日本語を並べ、私を安心させようと気を配ってくれる彼ら。また、私のためにはっきりとしたスローな発音と筆記で話しかけてくれる彼らの姿に、国際人とは何たるやを身をもって教えてもらったような気がした。

ところで、日本から来るはずの村澤さんの姿がない。聞いてはみたものの、「tomorrow」「come」という言葉だけが分かる状態である。何がどうなっているのか全く分からず、バスの旅は続く。

高速道路を過ぎ、だんだん心細くなるような田舎道へとバスは進む。出発から7時間後、とうとう目的地の Gutianshan（古田山）へ到着。山中に突然中国風の大きなゲートが見え、そこをくぐると白い建物がある。そこが私たちの活動拠点となるロッジ（いや、ホテルぐらいの貫禄がある）である。

ここで主任研究者である Dr. Pei（中国）、学習マネージャーの Anna（中国）、コミュニケーションディレクターの Adele（香港）、実地で教えてくれる植物研究所の研究者 Xiaojuan（中国）と出会う。そして部屋割りが行われ、私は Sam という24才のシンガポール人と同じ部屋になった。Sam はたくさんカメラの機材とパソコンなどのデジタル機器を見事に扱っている。とことん話を聞いてくれるし、会話に詰まれば google の HP から翻訳のページを立ち上げ、日本語に直してくれる。私の知り得なかったデジタルな問題解決の引き出しをたくさん持っている、本当に優しく頼もしい若者である。

みんなが一つの回転テーブルを囲み、中華料理三昧のディナーが始まった。たくさんの野菜料理に肉・魚料理、ごはん、すいか…。思っていたよりかなり豪華な食事である。

夜はいよいよオリエンテーション。Dr. Pei の話が始まった。すべて英語。パワーポイントによる画像が映し出されたもののほとんど理解できず、落ち込み気味の私。しかし、そんな私がシャキッとなり、ホッと安心するような、とてもうれしくなる話があった。

「私たちは一緒に過ごすチームです。だから、これからはみんなが一団となって行動します。年配者もいます。体力的にしんどくなる人もいます。Masaaki のように英語がうまく使えない人もいます。でも、今日からはチームです。お互いのことをしっかり理解しながら、チームとして行動していきましょう。」

慣れない言語の中での緊張に疲れ切っていた私。この英語が本当にこういう内容だったのかは定かではないが、この言葉で（よし、がんばろう！）と背中がシャキッと伸びたような気がした。

夜はたっぷりおしゃべりし、11時過ぎには寝る。毎日8時間ぐらい睡眠が保障されている。日本での日常では考えられないが、疲れているためか、この後も不思議なくらいよく眠れる日が続く。



門をくぐると



豪華なホテル（ロッジです）



回転テーブルと中国料理・かなり豪華

7月26日・Introduction

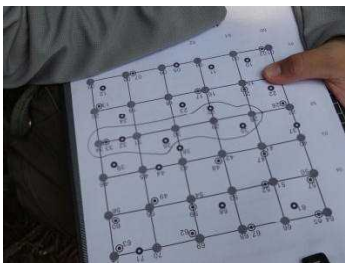
2日目。まず、Anna によるプロジェクトへの導入である。私も授業でよく使う手法であるが、参加型のワークショップが取り入れられ、参加者の積極的な態度が求められる。

初めに同じカードを引いた者同士でお互いを紹介し合い、みんなに他己紹介する。よく学級懇談などでやってきたことなのだが、この立場に立ってみると、親がこんなにも緊張してたのだということに気づかされる。次に「あなたが自然や環境のことで思い出に残っていることは？」という質問。次々とみんなが思いを語っていく。さて、困ったものだ。一通りみんなが語った後、私にみんなの視線が注がれる。私が単語の羅列で語ったのは、「I volunteered in Yakushima last year. Big sea turtle is hear. I surprised.」と稚拙な英語。情けない。しかしその後、アメリカ人の Mike がパソコンの画面を私に見せ、この話の感想を自分の感想と重ね合わせながら話してくれた。こういう意思の疎通は何ともうれしい。このワークショップは、チームの仲間意識を心情的体験的に高めてくれたように思う。

二つ目は、実際のフィールドワークの概要や意味説明である。Xiaojuan がプレゼンテーションで説明してくれた後、フィールドに出て実地で調査の方法を学ぶ。

Field work①・土と根を採取する

土壌や根に含まれるカーボンの調査のために、あらかじめ測量されたポイントから土を採取し、持ち帰る作業である。



調査ポイントはあらかじめ測量されており、このようなグリッド地図で示されている。



道なき道をアップダウンしていくと、ポイントが見つかる
説明しているのが Xiaojuan。



このような器具を使って



ハンマーを打ちつけて10cm ずつ掘っていく



10cm ごとの土を回収する。



サンプルの土を袋につめて持ち帰るのであるが、作業が進むにつれ、この土のサンプルは増えていく。これを何袋も持って道なき道をアップダウンするのは、なかなかの重労働である。



フィールドワークは、チーム1とチーム2に分かれて作業を行う。



深い穴となると80cm ぐらいになることも。写真は現地スタッフ。土地勘、力、技術…、さすがである。

7月27日（3日目）・本格的始動！

中国式お弁当

2日目の夕方には、飛行機が遅れるというどうにもできないアクシデントによって到着が遅れていた村澤さん（東京都中学校理科教諭）も合流。聞けば、かなり苦勞の末たどり着いたとのことである。ともあれ日本語が話せる環境にホッとする。

この日は弁当を持って朝からフィールドワークを行う。



「Science of Climate change」 Dr. Pei

(1) 気候変動の現状

世界的な気温上昇、降水量の変化などの現状がグラフで示され、また、その結果起こってきている現状や変化の様子が写真やグラフで示された。生物の種の絶滅や海面上昇、異常気象などの気候変動の問題は、CO₂など温室効果ガスによるものである。

(2) 気候変動の調査の方法

酸素を生み出す森林には、CO₂を O₂に変える働きがある。その際、炭素 C が分離され、森林の至る所に「カーボンプール」として蓄積される。そこに含まれる炭素の量を調べたり、落葉の種類、生物の糞等を調査することによって、気候変動の動きを調査することで、今後の気候変動の動向をつかむことができる。

(3) 今後大切に考えなければならないこと

グラフ等によって、これからの展望を数値で示された。気候変動を人々の努力によって変えていくことは、多くの知恵とできるだけたくさんの人たちの意識変革が必要だと感じた。



Dr. pei

7月28日（4日目）・研究所での活動

連日のフィールドワークで疲れだした頃、併設の研究所でのラボワークが行われた。体は楽だが、老眼になりだした目と頭が相当疲れる。私にとっては、フィールドより大変な細かい作業であった。



Lab work①・採取した土から根を取り出す



採取した土を出し



根っこ（大きいものだけでなく小さいものも）を



ピンセットで
取り出ししていく



集まった根っこ



根っこが取り除かれた土



土は研究機関に運ばれ、
調査されるようだ。



根は学生や職員によって丁寧に洗われ、生きているもの、不活性なもの、木質なもの等に分類し調べる。



この日の夕方には、アースウォッチインディアの Dr. Khalid によるプレゼンテーションが行われる。インドでも森林の気候変動の調査が行われていて、その取り組みの紹介である。中国 Gutianshan の調査と似てはいるが、環境のちがいによって、植物にずいぶんちがいがあるようだ。

何も予定がない夜は、ムービータイムが設定されている。期間中、自然や環境に関する映画を4回鑑賞した。



Dr. Khalid

7月29日（5日目）・Field work（高所にて）

Field work ①の活動も、5日目ともなるとボランティアの自立した活動によって行っていく。

この日は自然林地帯には変わらないが、ずいぶん高所へと向かうことになった。急勾配な斜面。道など全くない。土を掘り出すポイントでも、もう平坦な部分などほとんどなく、勾配のきついところで枝などを持って体を支えながら作業を行う状態である。私は、シンガポールの4名のボランティアと現地中国人スタッフとでかなりの箇所の土を掘ったように記憶している。



急斜面での作業

かなりきつい作業ではあったが、作業を終えて森林から出たときの解放感とそこに広がる景色は、もう格別である。共に汗を流し、共に充実感を味わう。みんな自分たちの活動に「よくやった！」



下山時、裏山からロッジを臨む

という共通の思いを味わえることも、このアースウォッチの魅力ではないだろうか。ちなみに、仕事を終えて部屋に戻ると、みんなぐっすり昼寝の状態であった。

7月30日（6日目）Tea picking & Village

土曜日と日曜日は、完全に作業はオフ。朝からみんなで自動車に分乗し、茶摘みに出かける。

日本では馴染みのお茶であるが、私はお茶の葉の現物に触れるのが初めてである。お茶の葉の新芽の部分のみを摘んでいくのであるが、慣れてくると意外とハマってしまう。

茶摘みの後は、農園のご主人の家を訪問。お茶の製造工場になっていて、その過程を見学させていただいた。お茶もごちそうになり、お土産用に買うことにした。気候変動のことだけでなく、いい社会勉強にもなった。

また、この日のディナーは Village で夕食。私たちの疲れる頃合いを考えた粋な取り計らいである。また、ちょっとお酒が入ると、これまでの英語への苦手意識も忘れ、もうなりふりかまわず日本語で話せてしまうから不思議だ。「あなたには英語は必要ない」とまで言われて乗せられ、「英語が分からないのが私」という素の自分が出せるようになると、話したくてしかたがない、聞きたくてしかたがない自分が抵抗なく出せるようになる。いつの間にか異文化を楽しみながら生きている自分に気づく。気持ちをリフレッシュできる楽しい時間であった。

炎天下の茶摘み体験と工場見学



古田山近くの Village にて

7月31日（7日目）・Recreational day

この日は隣の江西省の大きな街（婺源？）まで観光に出かけた。観光村に入って見て回る。ロッジにいたのでは分からなかった

中国の人々の生活を身近に感じることができた。



江西省の大きな街

8月1日(8日目)・Field work②

久しぶりのフィールドワークである。この日は車で20分ほど移動し、そこから山道をひたすら歩いた山中にある「プランテーション」の植林地帯が仕事場である。途中、民家あり、プランテーションの木を切り出す仕事あり、いろんな中国の人とも出会い、彼らの生活を垣間見ることができた。

中国の人たちの暮らし



Field work②・定点で葉・虫糞・枝・実等を採取する



指定されたポイントに、ネットが仕掛けてある。



決められた日数放置すると



落ち葉やごみなどがここに集まる



フィールドで、これらを回収する。

8月2日(9日目)・プランテーション

朝から「今日が最後のフィールドワークだよ」という会話が聞こえる。確かに残りわずかとなってきた。もはや一分一秒が貴重に思えてならない。

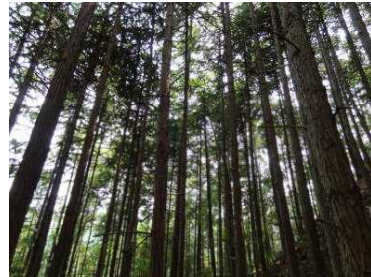
この日の最後のフィールドワークは、昨日のプランテーションの森での土の採取である。土の採取はこれまで何度もやってきた仕事であるが、だからこそ愛着を感じてしまう。みんなも同じことを思っているようで、「何だかさみしいね」などと話しながら仕事に向かった。

最後の仕事は、チームで何十カ所もの穴を掘り、たくさんの土を採取した。

深いところの土は、黄色みかかっている



Field work③・プランテーションと自然林



自然林(左)とプランテーション(右)とでは、こんなにも森林の様子が異なる。これらの土壌や根、葉、枝、実、虫糞、そこに含まれるカーボンの量などを比較し、今後の人間による環境保護の方向を探ろうとしている。

この日から、アースウォッチ中国の Leon がチームに合流。夜のミーティングでは、これからの中国のプロジェクトがいくつか紹介される。計画中だというパンダのプロジェクト、万里の長城の周りにある森林の調査、太湖の生態系など、かなり興味深い話の連続であった。

夜、急にみんなでトランプをしようということになった。何をしようかという話で日本の「ババヌキ」を教えると、急に何かに火がついたように盛り上がり、この日から「ババ〜」という言葉が流行となった。じゃんけんも「さ〜いしょ〜はゲー」という日本の言い方で盛り上がり、ここから最終日まで、もう何度やったか分からないくらい何度もババヌキに興じることになった。



8月3日(10日目)・Lab work②

いよいよラボワークも最後となった。

前回のラボワークでも、次に挙げる「採取物を葉・虫糞・枝・実等に分類する作業」は行っている

のであるが、どのように採取するか、これにどういう意味があるのかは分かっていなかった。しかし、Field work ②を通して、やっと今までやってきた採取物の分類について理解できたように思う。

細かい作業で、しかも専門的な内容であるため、教えてもらいながらの作業だったが、いろんな会話をしながらのラボワークは、とても楽しい時間となっていた。

Lab work②・採取物を葉・虫糞・枝・実等に分類する作業



フィールドワーク②で採取した後、48時間乾燥させたサンプルを出し



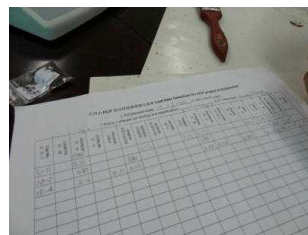
種類ごとに分類する。かなり細かい作業だ。



Evergreen (常緑), Rhoova (馬銀花), Pinmas (馬尾松) 等に分類。右写真の小さな粒は、虫糞である。



これらは、種類別に重さを測定し、



サンプルごとに測定値を記録



測定が終われば、種類ごとに袋につめる。



細かい残りかすまで測定する。



測定後、これらは再び森林に戻され、数日間放置される。その後、再び研究所へ持ち帰り、乾燥後重さ等が測定される。これにより、カーボンの量の変化を把握する。



研究所内には、いろんな植物の標本がある。

根気！



8月4日 (11日目)・展望台~Tower~

Gutianshan で過ごす最後の一日。朝は展望台に向かう。展望台と言っても、それはひたすら山を登ったところにある建物である。

そこは360度広がる緑の世界。この森林で二週間過ごしてきたのかと思うと、何だか感慨深いものがある。ここでずっと自然と関わり、いつの間にかあたりまえのように感じるようになっている自分。でも、あと少しで都会へ帰る。この自然あふれる風景の尊さを改めて感じたように思う。

午後はいよいよ最終。Research Summary、そして Wrap up へとプログラムは進む。

まずは、フィールドや研究所でお世話になった Xiaojuan による

Research Summary。わざわざ私たち用にプレゼンテーションが編集されている。入所の時に説明された「このプロジェクトの意義」が、体験を通して学んだ今はとてもよく理解できる。しかも、思い出の穴掘り器や土をたくさん入れて運んだかわいいキャラクターが描かれたカバン、共に汗を流した仲間たちの生き生きとした表情が映し出され、ついウルッときてしまう。

最後に、こんな話があった。

「Masaaki はきっと大変だったと思う。中国語も英語も通じない中で、それでもよく力を貸してくれた。」…もう最高のほめ言葉である。



苦労して山を登ったら、そこには自然の壮大な風景が360度広がる

Wrap up・最後のワークショップ (by Anna)

①この二週間の思い出を絵で表現してください。

この二週間のプログラムやそれに関係した人たちを改めて Anna が紹介。その後課題が提示され、それぞれが絵を描き、思い出を語った。ちなみに私は、ビールの絵を元にみんなで盛り上がった Village での思い出と意思疎通ができた喜びを語った。



②最初に書いた「目標」はどうだったか話してください。

tell for children forest…稚拙な英語であるが、これが私の入所時のワークショップで書いた目標である。私は紙に「人」「温」という漢字二文字を書き、「今は自然だけでなく、人の温もりが人を助けることを子どもに伝えたい」と話した。



③皆さんはチーム1、このプロジェクトの先駆者でした。次に来るチームに言葉を残してください。

私が書いた言葉は、「汗 (sweat)」「力 (power)」「心 (mind)」である。ここまでにも記述したことではあるが、共に汗を流し、共に力を出し合い、共に心を出し合うことで人はつながるのだということを実感したこの二週間。ぜひこのことは子どもたちだけでなくこれから出会ういろんな人たちに伝えたいと思う。

④このプロジェクトを本にするとして、本に何というタイトルをつけますか？

「大切的中国自然 and Human」と訳の分からないことを書いている私。でも、分かりやすく一言で日本人に言い表すなら…中国語と英語を使って、自然のことと人のことを表したいと思う。けっこう考えた末の言葉である。



⑤あなたにとってアースウォッチとは？（あなたなりの表現で書いてください）

私は、思いきり日本語でこう書いた。

「地球を大切に作る人たちが集まっている。だからこの人たちは人を大切にできる人たちだと思う。」

最初にも述べたが、私はここに環境教育と人権教育との接点があるように思えてならない。この人たちはバリバリ理系の環境問題の研究者であるが、環境を大切にするためにデータを求めて山を歩き、汗を流し、それを研究し、それを広めようと国際社会に訴え、あたたかくたくましく活動している。「環境」というみんなのものを大切にする活動は、当然「人」を大切にすることであり、生き物をはじめとするあらゆる「いのち」を大切にするのである。そして、研究者たちはこのような目的に向かうことで「自分」の生き方を高めているのである。

自分も人も、あらゆる生き物のいのちも…。人権教育の大切なポイントが、ここでたくさん見つかったような気がする。

⑥（カップを持ち）このカップに今の思いを入れていきましょう。今の思いを話してください。

いきなり私にカップが回ってきたので、ここ数日みんなの間で流行していた日本語、「ありがとうございます」（私）、「どういたしまして」（みんな）を数回繰り返し、笑いで終わってしまった。でも、私が伝えたかったことはこんな「おちゃらけ」ではない。数日前から「最後こそ英語で伝えよう」と辞書で調べて英作した文章を用意していたので、最後にもう一度手を挙げて、今度は思いきり英語で感謝の気持ちを伝えた。

最後に Leon が胡弓演奏を、Dr. Pei が自作の二週間の映像を上映（スライドショー）してくれた。いろんな出来事や自分の成長を思い起こし、思わずウルツときてしまった私であった。



参加型のワークショップをうまく取り入れ、私たちを感動の世界へと誘ってくれた。心に残る最後の学習タイムだった。

夜、最後のディナーである。たくさんの料理を囲み、おしゃべりあり、Leon の胡弓演奏あり、Justin の民謡らしき中国の歌、Xiaojuan の中国の歌あり、もちろん日本からは Kana さんの手品と私の郷土の「シャコ踊り」も披露し、楽しい時間は過ぎていった。

夜はみんなで最後の「ババヌキ」。よくまあ「ババヌキ」だけで連日こんなに盛り上がったものだ。

名残惜しいが、翌日は Gutianshan を離れ、杭州へ向かう。



8月5日(12日目)・プロジェクト終了～杭州観光

朝早くに Gutianshan を発ち、昼過ぎに杭州へ到着。皆がそれぞれの方向へと向かっていった。

私は、最後の一夜をシンガポールの若者たちと過ごすことになった。中華風ファーストフード、タクシー、おみやげ店が並ぶ河坊街、西湖、中華風レストラン…。一人では決して行くことはできなかった所へ行けたのも、彼ら息子・娘のような年代の若者たちのおかげだ。

夜遅くまで若者らしくファッションストリート「武林路」を練り歩き、自分まで若くなった気持ちになる。一風変わったオジサンと若者たちの集団に映ったのではないかと思うが、本当に貴重な体験をさせてもらった。



杭州・夕暮れの西湖

8月6日～7日(後日)・再び単独行動～帰国

翌日の朝、若者たちに私がこの日一人で泊まるホテルまでのタクシーの世話までしてもらい、いよいよ仲間たちと別れる時が来た。またいつか再会できることを思い描きながら、それぞれの道へ。

ちょうど台風「梅花」が上海に近づきつつあり、翌日のフライトが心配される中、私はここで心細い単独生活に戻った。

この日は一人で杭州市内を観光。台風による大雨に遭遇し、全身ずぶぬれになるなどさんざんな目に遭う。

翌日は、この台風の心配などどこにいったかのような好天。飛行機は全く揺れることもなく順調に飛び、無事日本へ帰国することができた。



突然の大雨

この経験を子どもたちにどう還元するか

(1) 子どもたちに伝えたいこと～私が学んだことは何だったのか～

①問題解決の方法

まず、気候変動という大きな環境の問題。この問題を解決するために、世界中で多くの人たちが奮闘している。中国の学者たちは、研究という方法でこの問題の解決を図っているし、Leon たちアースウォッチの職員は、世界中の人たちに体験できる場を提供することで、環境に関心を持つ人たちを育てようとしている。フィールド調査や実験観察などの研究で、企画と実行による人材の育成で、広報や啓発・協賛(今回の花王などのバックアップ等)で…。いろんな環境問題解決に向かう道筋を開拓し、それぞれが日夜努力していることは、ぜひ伝えたいと思う。

また、私たちボランティアも、いろんな問題を解決しようと努力してきた。小さいことかもしれないが、早速環境問題の学習の場で言葉の壁にぶち当たった私。そんな私がどうこの問題を理解しプロジェクトに参加するか…。単なる労働力としてだけでなく、しっかり理解して参加するために、言葉の壁を越えて質問したり、何でも話せる人間関係を作ったりする。これも問題解決だし、私にあの手この手の方法で伝えようとしてくれた同僚たちの努力も問題解決である。

私の場合、最初の三日ぐらいは「カーボン」を「二酸化炭素」だと思い込んでいて、「炭素」というものと環境との接点を全く分かっていなかった。そのことを同室の Sam に質問すると、分かりやすくデジタル機器で教えてくれた。

つまり、問題解決にはいろんな方法と手段、資料収集、意志力等が必要で、それを自分なりに見つけ出し実行(解決)していくことが大切なのだ。ここでのいろんな体験やエピソードから、問題解決への強い意志と実行力で環境に向かい合っている人たちの生きざまを伝えたいと思う。

②表現力やコミュニケーション力の大切さ

言葉が分からないと、人間は人との間に壁を作ってしまう、自ら閉鎖的になって意欲すら失ってしまうようである。それに、たとえばやさしいことをしてもらっても、感謝の気持ちを伝えることすらできない…。今回言葉の通じない世界に入ってみて、痛いほど言葉の大切さを実感した。

確かに、悩まずとにかく日本語でも何でも話しかけるセンスや度胸（私は三日目ぐらいから開き直り、日本語でしゃべりまくったが…）も、人とつながっていく上では大切なことかもしれない。しかし、言語が分かればもっともっといろんなことが理解できたのではないかと思う。

(2)子どもたちに伝えるための留意点

①他人事ではなく自分の問題として（くらしに生かすために）

砂漠化や森林破壊、温暖化による氷河の融解や海面の上昇…。今、世界ではいろんな環境の問題が起きている。しかし、これらが「どこか遠い世界で起きている問題」としてとらえられてきたのではないだろうか。これまでも環境の問題は授業で扱ってきたが、問題が大きすぎたり実感として感じるものがなかったりするのためか、どうしても他人事になりがちだったように思う。

自分の問題とするためには、何か感動を与えたり自分たちの生活と結びつけて学んだりすることが大切である。5年生で経験する「自然学校」など、貴重な自然の中でいろんな感動を味わってきている子どもたち。その場面を作文などで再現しながら、身近に環境の問題をとらえながら学んでほしい。

また、「うわ～」というような感動も与えたいと思う。右の写真は、Gutianshan の山中にたくさん落ちている「葉脈」であるが、これらを取り出す実験なども取り入れながら、感動の中で学んでほしいと思う。

最近は節電の問題もクローズアップされたが、自分の問題としてとらえることで、それがくらしの中で生かせ、実行できるようになってくれたらと思う。



②環境問題に見通しと展望を

問題が難解だったりスケールが大きすぎたりすると、どうしても「気候変動を改善するなんて無理」と見通しが持てなくなってしまう。何か「私たちなら変えていけるんじゃないか」と思える題材を与え、展望を持ちながら学んでほしい。そのためにも、単なる私の講演会ではなく、参加型の学習や成功を実感する経験を仕組み、自信の中でこのプロジェクトを理解できるように授業計画を立てていきたいと思う。

終わりに

この報告書をまとめるにあたり、自分の記録を読み返し、研究者たちにメールで送っていただいた英文の資料を解読した。すると思わぬ発見があったり、今になって「カーボンサイクル」などの仕組みが分かったり…。改めて「ほお」「なるほど!」と感動に浸っていると、ずいぶんまとめるのに時間を費やしてしまった。

今も時々メールで世界と交信している。先日は突然「チャット」とやらの招待され、またまた稚拙な英語で交流することになり、英語で「ahaha」と笑い合っている。

写真をながめるたびに、この二週間の自然にどっぷり浸った日々をなつかしく思う。

気候変動をつかみ、そこにアプローチしようとする人たちのたゆまない努力が、これからの地球に幸せをもたらすにちがいない。

この夏、それを確信できる貴重な体験をさせていただいた。アースウォッチジャパン、花王株式会社、そしてこのプロジェクトで直接お世話になったたくさんの方々、また陰ながら私たちを支援していただいたの方々…。いろんな方々に感謝申し上げたいと思う。ありがとうございました。

